台大日本語文研究第 51 期
2026 年 06 月，頁 57-79
2026-03-22 收稿，2026-05-30 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202606_(51).0003

從〈女學生〉視角閱讀真杉靜枝的戰時下文學
—以作品〈女兒〉為中心—

廖秀娟*

摘要

真杉靜枝是戰爭時期在日本文壇活躍的女性作家中，少數擁有居住過台灣經驗的作家。對於少女時期在台灣渡過的真杉靜枝來說，台灣就如同是故鄉一般的存在，也是她文學創作時的重要題材。近年來，由於台灣研究興盛，她的作品中有一半是以殖民時期的台灣為題材，再加上女性細膩的描寫手法而受到注目，是研究殖民時期台灣文學時不可忽視的作家。

作品〈女兒〉發表於 1940 年 5 月號的《新潮》，內容描寫母親與女兒兩人之間宿命般的對立，到最後的和解。在過往的研究中，大多將此部份描寫從作家本人與母親對立的親身經驗來進行解釋。本論文將從〈女學生〉的視點來進行作品分析，嘗試新的讀解。

關鍵詞：女學生、殖民地台灣、少女、生理期、女兒

* 元智大學應用外語系副教授

臺灣大學學術期刊資料庫

Masugi Shizue's Wartime Literature through the Lens of the'Female Student': Focusing on "Daughter"

Liao, Hsiu-Chuan*

Abstract

Masugi Shizue is an active female writer in wartime Japan. She is also one of the few writers who had experience dwelling in Taiwan. Because of such experience,

Masugi Shizue regards Taiwan like her home country and include Taiwan as an important part in her works. Along with the trend of Taiwan research, Masugi Shizue's works of intricately depicting Taiwan has make her an important writer when researching Taiwanese literature in the colonial period.

The work of 'daughter' that published in Shinchou journal in May 1940, told the story of a mother and her daughter who initially were against each other but eventually settled the disputes. Preliminary study tends to adopt the tension between the writer and her mother to interpret the work of 'daughter'. This study, however attempts to take the female student's viewpoint to analyze the work with an aim of finding new insights.

Key words: female student, colonized Taiwan, teenage girl, menstrual cycle, daughter

* Associate Professor, Department of Foreign Languages & Applied Linguistics, Yuan Ze University.

臺灣大學學術期刊資料庫

〈女学生〉から読む真杉静枝の戦時下文学
—「むすめ」を中心に—

廖秀娟*

要旨

真杉静枝は、戦時下の中央文壇で活躍した女流作家の中で珍しく台湾在住経験のある作家である。台湾で少女時代を過ごした真杉静枝にとって、台湾は故郷のような存在であり、創作時の重要な素材でもある。近年、彼女の作品は、大半が植民地時代の台湾を題材とするもので、尚且つ女性の観点から繊細に描かれているという視点から、台湾研究が盛んになるにつれ、大いに注目されるようになり、当時の台湾文学を研究するには、欠かせない存在である。

「むすめ」は、1940年5月号の『新潮』に掲載され、真杉の身辺の生活を多く取材した自伝的小説である。宿命的な母と娘の不和と和解を描いたもので、作中に描かれたヒロイン梶子の母（母の流産、生理などの身体描写を含める）への憎悪について、真杉静枝が母（みつい）との確執を描いたものだと、作家の実経験から解釈されてきた嫌いがある。本稿では、〈女学生〉を一視点として、敏感で繊細な年頃の女学生に焦点をあて、新たな読みを試みる。

キーワード：女学生、台湾、乙女、生理、むすめ

* 元智大学外国語学科准教授

臺灣大學學術期刊資料庫

〈女学生〉から読む真杉静枝の戦時下文学
—「むすめ」を中心に—

廖秀娟

一、はじめに

真杉静枝（1900～1955）は、日本植民地期に台湾在住経験のある数少ない女性作家として知られている。「私にとつては、父や母の住んでゐる臺灣が、故郷ででもあるやうな、なつかしさでしのばれる。／そして、臺灣のこととなると、お國自慢をするときのやうな顔になつて喋りたくなるのである」（「臺灣の土地」[1]）と、台湾で少女時代を過ごした真杉静枝にとっては、台湾は故郷のような存在であり、創作時の重要な素材でもあることがわかる。

彼女は、三歳の時、父真杉千里の仕事の関係で、一家をあげて台湾に移住することになった。彼女は台中病院附属の看護婦養成所に入り、卒業後暫く病院に勤務したが、十七歳の秋、両親の意思で、なかば強制的に台中駅の助役で十三歳も年上の藤井熊左衛門と結婚させられた。しかし、夫の暴力と放蕩で二人の結婚生活は長く続かず、二十一歳で出奔し、大阪の祖父母のもとに身を寄せた。のちに大阪毎日新聞の婦人記者としてインタビュー記事を取りに武者小路実篤邸を訪ね、それが契機となり、妻子ある武者小路との恋愛関係に陥り、彼の庇護を受けながら文学創作を始めた。

1927年に武者小路の後押しで、自身の結婚生活の破綻を題材にした処女作「駅長の若き妻」（文芸誌『大調和』八月号）を発表し、正式に文壇に登場、作家の道を歩み始める。一見、順風満帆なスター

[1] 真杉静枝（1941）「臺灣の土地」『南方紀行』昭和書房。原ひろ子監修（2000）『女性のみた近代 024　真杉静枝『南方紀行』』ゆまに書房、p.138 参照。

臺灣大學期刊資料庫

トを切ったように思える作家生活だが、武者小路との関係が新聞に報道され、世間に知られるようになったことで、彼と別れた[2]。

1934年頃、同じく台湾滞在経験のある作家中村地平と出会い、のちに同棲するようになったが、中村の親の反対に遭い[3]、「卒業旅行」と称して、1939年に二人で真杉の両親が暮らす台湾へ旅した後に別れた。その後、1942年に中山義秀と再婚したが、敗戦直後、台湾から引き揚げてきた両親及び未亡人になった妹一家が身一つで転がり込んでくることで、中山と折り合いが悪くなり、やがて1946年に離別した[4]。戦後、原爆被災地の広島・長崎への視察が契機となり、原爆被災者救援活動などに心血を注いだ。1955年6月29日、肺癌により五十五歳で生涯を閉じた[5]。

真杉静枝は戦時下に数多くの作品を発表し、1940年前後に注目され、高評価を得た女性作家の一人として認められた。1938年から短編集『小魚の心』(竹村書房、1938．12)をはじめ、相次いで単行本を発行し、精力的な小説の創作ぶりを見せた。それにもかかわらず、武者小路実篤の愛人[6]、中村地平の同棲相手、芥川賞作家中山義秀の後妻といういたってスキャンダラスな一面[7]のみが注目され、札付き

---

2 真杉静枝（1938)『小魚の心』(竹村書房）には、武者小路実篤との経緯が題材となった作品「小魚の心」、「話しかける人」、「松山氏の下駄」が収録されている。

3 平林たい子（1960)「真杉静枝さんと私」『自傳的交友録・實感的作家論』文藝春秋新社、p.36。初出は『別冊文芸春秋』1955年10月。作品「坂道」にも中村地平の父らしき人が登場する。(長谷川啓監修（2002)『〈戦時下〉の女性文学14 帰休三日間』ゆまに書房参照)

4 前掲平林たい子著書。「終戦で、臺灣のお父さんや妹さん一家が真杉さんを頼つて出てきた。結婚の最初のころは、むしろ真杉さんの方が經濟的には羽振りがよかつたが、戦争直後の戦犯追求(ママ)時代になると、戦争中羽振りがよかつただけに、彼女は相當鎖沈してゐた。そこに、父や兄妹やその家族の重石がかゝつたのだから、家庭はますます面白くないものになつた。(p.38)

5 竹田志保（2019)「真杉静枝―結婚への疑念」『女学生とジェンダー―女性教養誌『むらさき』を鏡として』笠間書院、pp.383-384。

6 吉屋信子（1962)「小魚の心　真杉静枝と私」『自伝的女流文壇史』中央公論社、p.103。「―（真杉静枝）という名を私が知ったのは、女流作家として知ったのではなく、武者小路実篤氏の愛人としてだった」(初出吉屋信子(1962)「真杉静枝の生涯」『小説新潮』第16巻第6号、p.234)。

7 鈴木直子（2010)「高度成長と〈女流作家〉―林真理子『女文士』における女のエクリチュール―」『日本文学』59巻11号、p.48。

臺灣大學圖書館典藏資料庫

の「悪評の女」[8]、「毀誉褒貶のはげしい人」[9]として思われてきた。真杉静枝の生涯を題材にした同時代作家の回想録や作品では、彼女がしばしば「「孔雀」を振舞う女」[10]、「三文の値打ちもない文学少女」[11]と譬えられたことも伺える[12]。

以上のように、虚栄心の強い女性像が鮮明に残されたため、彼女の文学作品の評価は長年不問にされてきた。しかし、近年、台湾研究が盛んになるにつれ、彼女の作品の大半は植民地時代の台湾を題材とするものなので、再び注目されるようになった。今回取り扱う「むすめ」も植民地時代の台湾を題材にした作品の一つである。

「むすめ」(『新潮』1940 年 5 月号掲載)は、真杉自身の身辺事情を色濃く反映させた自伝的中篇小説である。周知のように、真杉の著作にはエッセイや、取材記事、紀行文なども数多くあるが、その大半を占めているのは、「自身の生い立ちや、恋愛・結婚生活などの実生活の苦悩を素材とした私小説的なもの」[13]である。河原功によれば、1940 年前後の彼女の作品には、台湾を題材とするものが数多く見られる。「作風は、自分の経験を反映させた私小説風で、静枝自身を投影させたと思われる女性を、しかも不幸な女性を中心にして

---

8 十津川光子(1968)『悪評の女―ある女流作家の愛と悲しみの生涯』虎見書房。

9 阿部光子、林真理子(1995)「対談　風聞の女真杉静枝」『波』10 月号、新潮社、p.7。

10 巖谷大四(1977)「昭和女流文壇の開花」『物語女流文壇史　下』中央公論社、p.16。「「孔雀」を振舞う女」(p.16)「南支派遣軍に対する慰問の旅に行ってもらいたいという話があった。彼女は喜んで参加した。宇野千代と一緒だった。派手な和服に紫色のショールをかけ「孔雀」の姿で出かけた」(p.21)。

11 今日出海(1963)『迷う人迷えぬ人』新潮社、p.96。(初出『オール読物』1963 年 4 月)「顔の美醜にだけ女の誇りを託しているような、三文の値打ちもない文学少女を、うれしがって連れて歩き、家庭悲劇まで引き起していた、あの時分の武者小路さんの姿に見た」。

12 呉佩珍の調査によれば、真杉静枝の生涯を題材にした作品には、火野葦平(1958)「淋しきヨーロッパの女王」(『新潮』)、石川達三(1965)『花の浮草』(新潮社)、十津川光子(1968)『悪評の女―ある女流作家の愛と悲しみの生涯』(虎見書房)、林真理子(1995)『女文士』(新潮社)がある。(呉佩珍(2013)『真杉靜枝與殖民地台灣』台北市、聯經出版、pp.4-8)その後、詹柔蓁は同時代の作家の回想録や小説で真杉静枝が描かれた作品を増補した。(詹柔蓁(2022)『真杉静枝文学における女性像―女性の自我の視点を通して―』国立台湾大学文学院日本語文学系修士論文、p.4)

13 前掲竹田志保(2019)論、p.384。

臺灣人學術期刊資料庫

物語を進めていくというものがほとんどであった」[14]と、真杉作品の持つ私小説性を指摘した。その代表的なものの一つが本作の「むすめ」である。

ところで、真杉の妹が提供した資料を基に執筆された十津川光子『悪評の女』では、「「むすめ」の中の、女学校の宿舎に入っている梶子は静枝自身であるが、静枝は十四歳で台中病院の付属看護婦養成所に入っており女学校へは進学していない」[15]と指摘されている。すなわち、真杉は看護学校生時代を意図的に伏せ、それを女学生として描き直したのである。こうした事実を踏まえ、彼女の作品において「女学生」がどのような意味を担っているのかを研究動機とし、本研究を進めるものとする。

二、「むすめ」の特殊性

さて、真杉静枝の作品群を時代順に追ってみると、三つに分けることができる。初期作品に多くみられるのは、彼女の身辺を題材にとった私小説的な作品群である。例えば、母との確執、妹勝代との姉妹愛など台湾の家族を描いた作品[16]や、武者小路実篤、中村地平との恋愛話[17]などである。二つ目は、戦時下に積極的に関わった国策色が濃厚な作品である。例えば、当時の国策政策と呼応するような内容が多く描かれた『南方紀行』(1941)、『ことづけ』(1941)、『妻』（1942.1）、『凱歌』（1942.2）、『母と妻』（1943.4）などの小説集である。三つ目は敗戦後に、両親と妹一家の引き揚げ経験を題材にした引き揚げ物[18]である。

---

[14] 河原功（2000）「真杉静枝『ことづけ』解説」『ことづけ　日本植民地文学精選集 019【台湾編】 7』（復刻版、監修・解説：河原功）ゆまに書房、p.1。

[15] 前掲十津川光子『悪評の女』、p.22。

[16] 台湾の家族を題材にした作品には、「駅長の若き妻」、「むすめ」、「母親」など母親との確執を描いた作品のほか、「母の傑作」、「烏秋」のように未亡人になった妹との姉妹愛や「父の心」、「私の父」など父親を描いた作品もある。

[17] 武者小路との恋愛関係を描いたのは、「小魚の心」、「話しかける人」、「松山氏の下駄」、「芽」などである。中村との恋愛並びにその後の別れを題材にしたのは、「ながれ」、「話しかける人」、「風わたる」、「小生物」、「小魚と出征」、「母の傑作」、「風わたる」、「町の入口」、「ながれ」などである。

[18] 呉佩珍（2013）『真杉靜枝與殖民地台灣』聯經出版、p.18。

臺灣人學術期刊資料庫

以下は、上記の単行本を調査対象として、女学生が登場した作品をリストアップしてみた。

表 1 真杉静枝文学における女学生の登場作品

作品名	発表著作・年	女学生	人物
「駅長の若き妻」	『大調和』1927．08	女学生上がり	美那子
「南方の墓」	『小魚の心』収録、1938.12	女学生、18 歳	唐山氏の娘
「婚姻」	『小魚の心』収録、1938.12	朝鮮の女学校、女学生、18 歳。結婚十日後、出奔。	寿々子
「母親」	『ひなどり』収録 1939.10	女学生。18 歳の時、花嫁になる前に東京の叔母の家に出奔。	「私」
「土蔵の二階」	『万葉をとめ』収録、1940.05	女学生上がり、現在 24 歳。20 歳の時に母の勧める結婚をしたが、結婚生活に堪えられず、出戻りした。	「私」（正妻の娘）
「万葉をとめ」	『万葉をとめ』収録、1940.05	中流の家庭出身、女学校卒業、21 歳。無賃乗車で、感化院に入った。	三澤花枝
「むすめ」	『新潮』1940.05	台北の北部にある女学校の学生。16 歳。結婚三日後、大阪の祖母の家に出奔。	梶子
「三つの誓ひ」	『むらさき』1940.07～1942.02 全 20 回連載	女子大の受験を目指して、書生として奉公。	熱田美那子
「南方の言葉」	『ことづけ』収録、1941.11	築地、女学生上がり。夫と離婚して、植民地台湾に流れた。	木村花子
「妻」	『妻』収録、1942.01	奈良女学校（女学生上がり）	東山武代
「背の高い面影」	『凱歌』収録、1942.04	三年生、女子美術学生	「私」
「蟹」	『凱歌』収録、1942.04	おとしさんは、7 年前に夫に死なれて、宿の女中をして、中学生の息子と、女学生の娘を養っている。	娘
「その姉」	『帰休三日間』収録、1943	私立女学校教師、女学校四年生の菊組の女学生たち	櫻井雪子

（筆者作成）

臺灣大學學術期刊資料庫

それを更に分けてみると、女学生像を三つの類型に分けることができる。

(A)　私小説的な作品に登場する女学生像：

「駅長の若き妻」「南方の墓」「母親」「むすめ」。

(B)　教養のある女学生像：

「万葉をとめ」「三つの誓ひ」「南方の言葉」。

(C)　国策色の濃い女学生像：

「妻」「背の高い面影」「蟹」「その姉」。

（B）と（C）では、女学生の登場人物は脇役が多くて、重要な設定とされていないことがわかる。一方、（A）では、主役は女学生か女学生出がほとんどである。

周知のように、真杉自身は常々私小説的な作品群で自身の生い立ちや、過去の離婚歴、不倫、同棲など実生活の苦悩を題材にして、周辺の人物をモデルにし、それを世間に公開した。特に母との葛藤、出奔や離婚の話が多く題材として小説化されている。

ところが、表２に示すように、同じく私小説的な作品であっても、武者小路や中村との関連作品においては、ヒロインの役割は「女学生」としてではなく、愛人や女優として描かれる場合もある。しかし主としては「画家」（絵描き）として設定されている。

表２　真杉静枝の武者小路実篤・中村地平関連作品にみるヒロイン像

作品名	発表年月	人物名	お仕事	武者小路実篤、中村地平関連
「小魚の心」	1937.01 『婦人文芸』	お梶	絵描きのモデル、素一の愛人	陳素一（武者小路）・春吉（中村）
「話しかける人」	1938.12 『小魚の心』	彼女	絵描き、村島と愛人の関係だった	村島（武者小路）、禮二（中村）
「松山氏の下駄」	1938.12 『小魚の心』	桂子	四年間、松山氏と愛人の関係だった	松山氏/作家(武者小路)
「風わたる」	1938.12 『小魚の心』	梶子	絵描き	春吉（中村）との別れ話
「女主人」	1938.12 『小魚の心』	女主人	舞台の女優、愛人	旦那様(妻子持ち・武者小路)
「ある作家の死」	1938.12 『小魚の心』	お文	先生の愛人	作家（武者小路）

臺灣大學學術期刊論文庫

「ながれ」	1939.11 『新潮』	「私」	春吉の内縁の妻	春吉（中村）との別れ話
「母の傑作」	1940.06 『草履を抱く女』	桂子	絵描き・今は会社勤め	平次（中村）との別れ話
「町の入り口」	1941.03 『文藝』	露子	洋画家	梶原百太（中村）

（筆者作成）

要するに、同じく私小説的な作品群とは言え、「女学生」の設定は、彼女を想起させる登場人物の生い立ち（学歴）の設定に集中していることがわかる。

それが原因で、当時の作家には真杉に女学生出身のイメージが持たれるようになった。「この真杉さんのその日までの生い立ちは、明治三十八年福井県で生れ三歳で台湾に渡ったのはお父さんが台中の神社の宮司だったからで、台中女学校に学んだ」[19]（吉屋信子「真杉静枝さんの生涯」）、「静枝は台湾で高雄の女学校に通った。一年の時から優等生となり、ことに作文と国語にすぐれた才能を示した」[20]（巖谷大四「昭和女流文壇の開花」）。

このような認識は、作家仲間の間にとどまらず、戦後に出版された復刻版の「解説」においても彼女は「台湾の両親の許で少女時代を過ごし、台中高女中退」[21]、「幼時は祖父母に育てられ、小学校を卒業後、父母のいる台湾に渡り、台中高等女学校に入学するが、卒業間際に両親の強制によって女学校を中退、結婚をさせられる」[22]と、女学校中退者として紹介され、根強く定着していた。

真杉の自伝的私小説（A）を概観すると、作中において真杉を投影したと考えられる登場人物の高校時代は、ほとんど女学生として設定されている。ところで、「静枝は十四歳で台中病院の付属看護婦養

[19] 吉屋信子（1962）『自伝的女流文壇史』中央公論社、p.110、初出「真杉静枝さんの生涯」『小説新潮』第 16 巻第 6 月、p.237。
[20] 巖谷大四（1977）「昭和女流文壇の開花」『物語女流文壇史　下』中央公論社、p.19。
[21] 沼沢和子（2000）「解説」『女性のみた近代 024　真杉静枝『南方紀行』ゆまに書房、p.315。
[22] 岩淵宏子（2002）「真杉静枝『母と妻』解説」『〈戦時下〉の女性文学 12　母と妻』ゆまに書房、p.1。

臺灣大學學術期刊資料庫

成所に入っており女学校へは進学していない」[23]という十津川光子の指摘を視野に入れると、真杉の学歴に対する異常なまでの執着が浮き彫りとなる。その執着心を裏返してみると、彼女の文学においては〈女学生〉という設定が重要な意味を付与されていることが明らかとなる。

十津川光子は、『悪評の女』で真杉が意図的に十四歳から十七歳にかけての看護婦時代の過去を伏せて、作品中に作者自身と思われる登場人物を女学生にすり替えた理由は、当時看護婦の社会的地位が低いからだとし、「明治のはじめから看護婦は「銀杏返しの出戻りか、バクレン女のなる仕事」と軽蔑されており、看護婦なんぞになられては、一家眷族肩身の狭い思いをしなければならなかった」、「看護婦学校卒業よりは、女学校中退にしたほうが、はるかに社会の受けはよいのである」と指摘した[24]。

一方、林真理子の「女文士」では、人物設定が女学生に変えられたのは、「女学校も出ていない女だとわかったら、男たちにどれだけ苛められるかわからない。とにかくあの人たちは、私のことが嫌いで嫌いで隙あらば突き落そうとしているのだから……」という理由で、真杉がほかの男性作家に見下されたくないところにあると考えている[25]。

しかし、真杉の個人事情や、林真理子の創作意図を探るよりも、作者自身の作品を通して客観的に分析することが重要である。そこ

---

[23] 前掲十津川光子（1968）著書、p.22。
[24] 前掲十津川光子（1968）著書、p.22、p.44、p.52。
[25] 前掲林真理子（1995）著書、下記の引用は文庫本版（1998）に拠った。「今はそんなことはないけれど、昔、看護婦っていったらよほどの莫連か、貧乏な娘だと思われていたからね。うちはもちろん女学校へ行けるくらいのうちだったけれど、その頃まだ台中には女学校がなかったのよ。女学校も出ていない女だとわかったら、私は男たちにどれだけ苛められるかわからない。とにかくあの人たちは、私のことが嫌いで嫌いで隙あらば突き落とそうとしているのだから……」。（pp.42-43）

臺灣大學學術期刊檢索系統

で、真杉の私小説的な作品（A）[26]の中から女学生が登場する作品を取り上げて、表３に示すように分析を行った。

表 3　真杉静枝の私小説風作品（A）に女学生が登場する作品の分析

作品名	「驛長の若き妻」	「南方の墓」	「母親」	「むすめ」	「自傳小説 或る女の生立ち」
初出	『大調和』 1927.08	『小魚の心』 1938.12	『ひなどり』 1939.10	『新潮』 1940.05	『新潮』 1953.05
場所	高雄	高雄・舊城	中部の小さな町 15年後南部のB駅	高雄・舊城	台湾の南端Kといふ古城 （舊城）
ヒロイン	美那子 18歳 （学校出たばかり）	驛長の娘 17歳	「私」 18歳 学校の寄宿舎	梶子 16歳 台湾の北部にある女学校	静枝 17歳 町の学校
母親が娘に憑かれた身	×	×	○	○	▲危篤
母親の女性性への嫌悪	×	×	×	○	▲ （流産のみ）
夫の仕事	駅長	駅の助役	事業家の野心を持つ人	母の縁戚関係者	×
貞操の喪失	○ 結婚した	○ 結婚後、実家に戻った	× （結婚前に出奔）	× （形だけの結婚、出奔）	○ 大阪に出奔
夫からの暴力	×	○	○	○	×
出奔先	×	東京へ 家出した	東京、 叔母の家	大阪、 祖母の家	大阪の YWCA

（筆者作成）

それらの作品を並べて比較した際、際立って浮かび上がるのは、主人公が母の女性性への強い嫌悪感を示す描写に紙幅の多くを割いた「むすめ」である。加えて、短篇「母親」が「むすめ」の「１」の内容と高度に重複している点も看過できない。

三、「母親」から「むすめ」へ

作品「むすめ」は「１」「２」「３」と区分される三部構成をとっている。そのうち「１」は、1939 年 10 月刊行の「母親」と約八割の内容が重なっている。すなわち、「１」のみであれば作品名は「母親」

[26] 「駅長の若き妻」「南方の墓」「母親」「むすめ」の四作は戦前に発表された作品であるのに対し、「自傳小説 或る女の生立ち」は真杉静枝が戦後に発表した自伝的小説である。ここでは、対比の対象として取り上げるにとどまることをあらかじめ断っておく。

臺灣大學學術期刊論文檢索

となるが、「２」、「３」を加え、さらに作品「母親」には見られない母親の女性性への嫌悪描写を付け加えることによって作品は「むすめ」へと成り代わったのである。

『新潮』1940 年 5 月号に掲載された「むすめ」は、真杉の身の回りの出来事を主な素材として書かれた自伝的小説である。宿命的な母と娘の不和の「１」から武者小路実篤や中村地平と思わしき登場人物との失敗に終わる恋愛の「２」を経て、最後に母との和解までの「３」へと描いたものである。作品の粗筋は以下の通りである。

「１」の章では、母が電車に轢かれて手術をうけている梶子の夢から始まる。梶子は幼い時からいつも母に叱られて、母から愛されていないと思い込んでいる。ある日、母の病気で女学校の寄宿舎から呼び戻された梶子は医者の言葉で、それは母の流産だと知り、「耳たぶの千切れる位ゐ恥ずかしいことに思はれ」た。彼女は病室の母を見舞いもせずに台北に引き返すのである。

国語の先生龍田との散歩が街の話題になったりしたから、両親は彼女を十七歳も年上の男・縁戚の忠左衛門と結婚させた。仮祝言をして、台北の女学校にもどった梶子は、翌日、基隆を出る船に乗り、大阪の祖父母を頼って出奔した。後を追ってきた母や、忠左衛門との間で話し合いが待たれるが、結局は破談になった。

「２」の章では、東京で自立生活をしている梶子を励ましてくれる庇護者（武者小路実篤）との出会いと別れ、そして東京で知り合って同棲した春吉（中村地平）との生活、十二年ぶりに会った妹の光枝から知らされた母の大病のこと、などが綴られている。

「３」の章では、梶子が春吉とともに台湾へ渡るが、やがて春吉と別れて一人で南部の両親を訪ねる姿が描かれる。両親や妹、妹の子どもたちと過ごすうちに、大病を経た母親の態度も昔とはすっかり変わり、長年抱えていた母との感情的なしこりが解けていく。梶子が台北で待つ春吉と再会したとき、春吉と別れる覚悟がすでにできていることを感じさせる場面が描かれ、作品世界はそこで終わりを迎える。

臺灣大學學術期刊資料庫

前述のように、「母親」では母娘の確執をめぐる描写こそ存在するものの、娘が母の女性性に嫌悪を示す描写は一言も見られない。むしろ、母親の娘への憎悪が幾度も語られ、強調されている。「母親」で夫に多大な苦労を負わされた母親が赤ん坊であった娘を捨てて家を出ようとする。しかし、娘の泣き声で足を止められ、「こんな子さへなかつたら、とその時、どんなに、子を憎んだかしれん」と言い、自分の不幸の原因を娘に帰して憎悪を抱いたのである。

そして、娘である「私」もまた、「母は、私のことを憎む筈であつた」、「肉親達は私のことを、今に町で飢死するにちがひない、あのやうに、愛情も恩愛も知らぬ娘はない、と云つて、憎んでしまふやうになった。母親は殊に、私に向けて、さういふ感情を激しくもつてゐるやうであつた」と、母からの憎しみを感じ取り、「全くいつの間にか、私は、空や星や月をみて、肉親の顔を想ひ、泪を流すといふやうなやさしいことをしない女になつてゐた」と思い、親を愛せなくなった娘となったことを自覚している。

一方、「母親」と違い、「むすめ」においては、「もう母の顔をみるのは、いやだと思つた」、「どうしても、母からは遠ざかりたいと思つた」、「母を嫌つて、卒業すると同時に家を出たい」といった描写を通じて、娘の梶子が母親に向ける「嫌悪」が繰り返し叙述されている。とりわけ母の身体や女性性に対する忌避が強調され、その表現が重層的に提示されている。

例えば、母親の流産が判明した際、「梶子は表情がバラバラに千切れ飛ぶ位ゐ狼狽した。醫者の車とすれちがつてから、さういふ母の病床へゆくのが、いやでたまらなかつた」と記されている。さらに、着物にある不始末の斑点をつけたことに無頓着な母の「はしたない笑顔」に対して、梶子は「自分が凌辱されでもしたやうな、顔のあげられない怒り」を覚え、「母の、女としての生理に触れること」を「咽喉がつまる位ゐ拒否した」と描写されている。

そして、「女學校の寄宿舎で兆しはじめた最初の生理のことも、だから梶子は、他の娘達のやうに、母に打ち明けたりはしなかつた。

臺灣大學學術期刊資料庫

／母にだけは、死んでも云ひたくない、そんな感じの方が強かつた」とあるように、母の流産や生理にとどまらず、梶子は自身の初潮に対しても母に知られるのが極めて不快だったのである。

作中に描かれた梶子の、母への憎悪について、先行論では「十代の鋭い感受性、潔癖な反抗心等が鮮やかに描かれている」作品だ[27]と言われるほか、身体が母に厳密に管理されることから逃れたい[28]という見解もある。一方、呉佩珍は、「むすめ」における梶子が母親にみせた嫌悪の感情描写は唐突に見えるものの、戦後に発表された自伝的小説「或る女の生立ち」に描かれた幼少期の真杉と母親との関係を照らし合わせれば、親子関係の亀裂の理由が浮かび上がると指摘している[29]。それは、「或る女の生立ち」に描かれた、母親が娘に対して示した態度上の裏切りや、生理現象に関する誤った導きによって生じた心理的外傷が、女主人公の成長過程における母娘関係に修復困難な裂痕をもたらしたためであると述べている[30]。

しかし、それはあくまでも「或る女の生立ち」における描写であり、決して「むすめ」と同一視してはならない。「むすめ」において、梶子が母親ないし自身の女性性、身体性への言及を忌避し、排斥する感情描写は、決して単なる作者真杉の母・みついとの確執に由来するものではない。なぜなら、その畏怖や嫌悪の対象は母親に限らず、性的な視線を向けてきた男性にも及んでいたからである。

四、欲望の視線への怯え

作品の中で、町では評判の野球選手である仙石という人が、帰ってくる梶子を夜道で待ち伏せていたことがある。

---

27 前掲十津川光子著書、p.50。

28 前掲詹柔蓁論、pp.56-61。

29 前掲呉佩珍著書、pp.27-28。原文「在〈女兒〉裡，梶子對母親厭惡的情感描寫，似乎顯得突兀。相對地，在戰後創作的傳記小說〈某個女人的生平〉中，主人公靜枝對母親厭惡情感的起源與生成有了確切的描摹」。

30 前掲呉佩珍著書、p.29。原文「二篇小說中，母親對女兒在態度上的背叛以及生理現象的誤導而造成的心理創傷(psychological trauma)，使得女主人公在成長過程中的母女關係，產生難以彌補的裂痕」。

臺灣大學圖書館授權資料庫

夏休暇のある夜、使ひからの歸りみちの梶子を、町では評判の野球の選手である仙石といふ人が待ち伏せしてゐたことがある。/（略）同じ道を歸りかかつた時、街路樹の蔭に街燈の光をさけて、同じ白絣の姿が、ぢつと梶子の下駄の音を待つてゐる様子をすかしみすると、梶子は怯えあがつた。あわてて、町角をちがふ方へまはつたが、どこまで逃げても、火の手に追ひかけられるやうな、神経質な怯えから、唇を白ませてゐた。（p.11）

とあるように、梶子の少女としての生殖可能な身体が狙われ、男性の欲望と脅威にさらされている。そして、父親と同じ学校に勤める国語の龍田先生は、ことあるごとに文学を話題にし、文学好きの梶子に近づいてくる。ある晩、文学の話をしているうちに感情的に高ぶった梶子が「東京へゆきたい」と言ったが、龍田先生は、いくらかうわずりながら、「しかし結婚して、赤ちゃんが生れられたりすると、文學の勉強はどんなになりますかね」と言った。

梶子が龍田先生の「赤ちゃんが生まれる」という言葉を耳にして初めて先生が自分に向けていた性的な視線に気づき、「胸のふくらみを斬りつけられて来られたやうな衝動をうけ」、「人の恥ぢらひに踏みこんでくるもの」と感じた。そこから浮かび上がるのは、男性から身体に向けられる性的視線に怯え、その対象から逃れようとするヒロイン梶子の姿である。

要するに、台湾北部の女学校に在学する十六歳の梶子は、チェホフの短篇集、「タンタヂールの死」、ワイルド「獄中記」を読みふけり、文学を熱心に求めるとともに、心身の純潔を希求する読書好きの女学生である。渡部周子によると、近代国家形成期である明治期に学校制度が整備され、就学期間が延長されるなか、とりわけ中産階級以上の女子を被教育者として想定した高等女学校が設立された。この制度において、十二歳から十七歳までの期間が女子の就学期と認められている。この就学期にあって、生殖可能な身体を持ちなが

臺灣大學學術期刊資料庫

らも結婚まで猶予された、この時期が「少女」期として位置づけられている[31]。

梶子は学校制度の守りで、純粋で無垢のまま、文学者の夢を追い続けている。しかしながら、初経を迎えたことにより、梶子は純潔な少女期が終焉を迎えるという意識を強め、母親に体現される女性性のみならず、自身の身体的変化や他者から向けられる性的視線までも拒絶しようとしたのである。

渡部周子によると、医師河島右一が私立大日本婦人衛生会で「月経の話」と題する講演を行い、「種族を繁殖させ、国の富強を保つうえで、欠くことができないものが、妊娠である。「婦人の任務」である「妊娠の本」となるのが月経」である[32]と主張したという。梶子も月経のもつ身体的、社会的な意味を意識したから、強烈な拒否反応を見せたのである。

しかし、少女の身体の管理者であり、家父長制的規範の担い手である母親は、娘の理想化された自己認識を容認しなかった。作品の中で、母が梶子の帰りを見て「どこへいつてゐたのかい？梶子ちゃん」と、心配を眼の色に出しながらたずねた。龍田先生といたことを知った母は、安堵を感じなかった。

> 「ねお父さま、龍田先生もあんまりでござゐますね。若い娘を、そんなにして夜、連出しなさつたりして。あんまりそんなことをなさると、梶子をほんとに医者にでもみせんならんかと思ひます。何を傷つけられてゐるかわかりませんからね」（「むすめ」p.14）

そこから「家父長制度の代理人としての母」[33]の姿が見られる。川村邦光は母親の役割について「性欲の発動の監視と指導は、根拠は示されないが、母親のになうものとされる。（略）ブルジョア家庭

[31] 渡部周子（2007）『〈少女〉像の誕生―近代日本における「少女」規範の形成』新泉社、p.12。
[32] 渡部周子（2017）『つくられた「少女」―「懲罰」としての病と死』日本評論社、pp.17-18。
[33] 上野千鶴子（2010）『女ぎらい　ニッポンのミソジニー』紀伊国屋書店、p.157。

臺灣大學學術期刊資料庫

内のプライベートな日常生活では、母親が子ども、とくに娘の管理者として定着し、母子関係が家庭のなかで中心的な位置を占め、家庭は濃密な性的空間として形成されていったのである」[34]と述べている。

「植民地の小さな町のことなので、その頃はまだ、梶子のやうな平凡な容貌の娘さへ、その帯の赤さ丈で、若い者達の間には刺戟になり、親達は、この娘の若さをかばふ為めに、まるで蕃界にでも棲んでゐるやうな怯えた思ひをする」という語りで娘の純潔を守ることは、いかに母親にとって神経をすり減らす営みであったかがうかがえる。

下記の引用は､作品の中で今まで検討されずにきた一場面である。それは、戦時下の作品においてきわめて異色な描写である。

> 梶子は、深い夕空の色の中に、體がゆらゆらと引きあげられるやうな錯覺をおぼえ、體の中に何か鳴り立つやうな荒々しいものが、たぎり起つてくるのを感じると、自分でも氣付かないうちに、服をぬぎ捨ててゐた。草いばらに脚を傷つけながら、その姿のままずつと深い草むらの中に踏みこんでいつた。ふはりと上服を草の下にひろげ、その上にむき出しの體を仰向けに倒すと、體の芯にまで、空の澄んだ青みがしみてくるやうに思つた。空の逞しさや、風の技巧、そんなものの中に、裸の體をさうしてゐるうちに、次第に梶子の眼には涙が湧き出て來た。この切ない感覺の、よろこびだけは、人に打ちあけることはできない、と思つた。(「むすめ」pp.9-10)

夕方の風に吹かれ、他者から向けられた性的視線を振り払おうとするかのように、ゆらゆらと服を脱ぎ捨て、裸になった梶子の身体には少しの欲情もなく、むしろ世俗の欲情をきれいにふき取ったような肉体性の伴わない精神的な無垢を読み取ることができるであろ

[34] 川村邦光（1996)『セクシュアリティの近代』講談社、pp.140-141。

臺灣大學學術期刊資料庫

う。そこから力強く浮き彫りにされたのは、心身において純潔でいたい、無垢な姿の「少女」像である。

五、おわりに

本稿では真杉静枝の戦時下に刊行した単行本を調査対象とし、作品に描かれた女学生像の特徴および登場数を整理した。その比較を通して、作品「むすめ」における主人公像の特異性が見えてくる。その特異性とは、他作品にはほとんど見られない、母親に対する強い心理的抵抗の描写である。本稿はこの点に着目し、「むすめ」の分析を試みた。

梶子が母親に対して抱いた感情は、思春期と重なる女学生時期に特有の心身の変化を背景として生じたものであり、成長過程における価値観の動揺や自己像の揺らぎが密接に関係している。つまり、「少女」からより成熟した段階へと移り変わる過程、言葉を変えていえば、純潔な身体から出産可能な身体（性欲の対象となる身体）へと変っていく時期において生じる、自己の在り方への葛藤が中心的な問題となっている。梶子の母への反発は外部的な対象に向けられたものというより、自己の変容を受け止めきれない内面の葛藤の表れであると捉えられる。

物語の後半にかけて、梶子の母親への態度は大きく変化し、最終的には和解を見せる。この変化は、彼女の内面的成長を象徴的に示すものである。本稿では、真杉が戦時下に発表した自伝的小説「むすめ」を「不機嫌な娘」[35]、母への憎悪という視点から読み直し、女学生という人物設定がどのような役割を果たしているかを手掛かりとして検討した。

作品「むすめ」で描かれるヒロイン梶子の、母への身体的な拒絶は、単に作者自身の母との確執を描いたものではなく、むしろ、〈娘〉から〈女〉へと変わる身体の変化を持て余す女学生の苛立ち、煩悶、

[35] 前掲上野千鶴子（2010）著書、p.130。

臺灣大學學術期刊資料庫

少女特有の心理変化を緻密に描き出したものであることが明らかになった。

戦争翼賛が第一とされた時代に、彼女の戦時下自伝的小説においては、女学生か女学生上がりの少女がよく登場する。教養は無論、「とにかく、結婚なんて、愛情がなきやしては、いけないものだわよ」(「南方の墓」)、「「愛しあつた者同志の夫婦つて、どんなだらう。―」近頃それを考へると、いつも彼女の胸はときめいた」(「駅長の若き妻」)、「でも、愛のない結婚をいたしましても」(「むすめ」)とあるように、臆せず愛情を謳歌し、それを貫くために出奔も惜しまない自由奔放さ、ロマンティックな女学生像がよく描かれた。さらに、「むすめ」に描かれる年頃の少女が持て余した、独特で繊細な感情性、神経質なまでの身体の純潔性への追及により、真杉文学における女学生描写は一層の迫力を持つようになり、学歴崇拝を遥かに超えた完成度を有した作品になったといえよう。

【付記】本稿は、2023 年第 46 回国際日本文学研究集会(「〈女学生〉から読む真杉静枝の戦時下文学」)及び、2023 年台湾大学日本語イノベーション国際学術シンポジウム(「真杉静枝「むすめ」論」)において口頭発表したものに、加筆・修正を行ったものである。席上、貴重なご意見をくださった方々には深く感謝申し上げます。なお、本稿は台湾・国科会(NSTC 111-2410-H-155-025)研究助成の成果である。さらに本稿を草するにあたって、審査委員の貴重なご意見をいただいたことに、心より厚く御礼を申し上げます。

【テキスト】

真杉静枝(1939)「母親」『ひなどり』竹村書房、pp.249-257。
真杉静枝(1940)「驛長の若き妻」『その後の幸福』昭森社、pp.225-252

臺灣大學學術期刊資料庫

真杉静枝（1948）「むすめ」『愛情の門』国際女性社、pp.4-47。
真杉静枝（1992）「南方の墓」『近代女性作家精選集 017　真杉静枝『小魚の心』復刻版、ゆまに書房、pp.287-314。
真杉静枝（2000）「臺灣の土地」『女性のみた近代 024　真杉静枝『南方紀行』』復刻版、ゆまに書房、pp.137-141。
真杉静枝（2002）「坂道」『〈戦時下〉の女性文学 14 帰休三日間』復刻版、ゆまに書房、pp.104-126。

【参考文献】（年代順）

平林たい子（1960）「真杉静枝さんと私」『自傳的交友録・實感的作家論』文藝春秋新社、pp.27-42。Hirabayashi Taiko(1960), Masugi Shizue to watashi, *Jidentekikouyuuroku . jikkantekisakkaron*, *Bungeisyunjuushinsha*, pp.27-42.
吉屋信子（1962）「小魚の心　真杉静枝と私」『自伝的女流文壇史』中央公論社、pp.103-128。Yoshiya Nobuko(1962), Kozakana no kokoro Masugishizue to watashi, *Jidentekijoryubundanshi*, *Chuokouronsha*, pp.103-128.
今日出海（1963）『迷う人迷えぬ人』新潮社 Kon Hidemi(1963), *Mayouhitomayoenuhito, Shinchousha*.
十津川光子（1968）『悪評の女―ある女流作家の愛と悲しみの生涯』虎見書房。Totsugawa Mitsuko(1968), *Akuhyou no onna―aru joryuusakka no ai to kanashimi no shougai*, *Kokensyobou*.
巖谷大四（1977）『物語女流文壇史　下』中央公論社。Iwaya Daishi(1977), *Monogatarijoryuubundanshi ge*, *Chuokouronsha*.
林真理子（1995）『女文士』新潮社。Hayashi Mariko(1995), *Onnabunshi, Shinchousha*.
阿部光子、林真理子（1995）「対談　風聞の女 真杉静枝」『波』10月号、新潮社、pp.6-11。Abe Mitsuko, Hayashi Mariko(1995), Taidan fuubun no onna Masugishizue, *Nami*, 10, *Shinchousha,* pp.6-11.

臺灣大學學術期刊資料庫

川村邦光（1996）『セクシュアリティの近代』講談社。Kawamura Kunimitsu(1996), *Sexuality no kindai*, *Koudansha*.

河原功（2000）「真杉静枝『ことづけ』解説」『ことづけ　日本植民地文学精選集 019【台湾編】7』ゆまに書房、pp.1-6。Kawahara Isao(2000), Masugishizue”Kotozuke”kaisetsu, *Kotozuke Nihon syokuminchi bungaku seisensyuu 019 taiwanhen7*, *Yumanisyobou*, pp.1-6.

沼沢和子（2000）「解説」『女性のみた近代 024　真杉静枝『南方紀行』』ゆまに書房、pp.313-317。Numazawa Kazuko(2000), Kaisetsu, *Josei no mita kindai 024 Masugishizue “Nanpoukikou”*, *Yumanisyobou,* pp.313-317.

岩淵宏子（2002）「真杉静枝『母と妻』解説」『〈戦時下〉の女性文学 12　母と妻』ゆまに書房、pp.1-6。Iwabuchi Hiroko(2002), Masugishizue”Haha to tsuma”kaisetsu, *Senjika no joseibungaku 12 haha to tsuma*, *Yumanisyobou*, pp.1-6.

渡部周子（2007）『〈少女〉像の誕生―近代日本における「少女」規範の形成』新泉社。Watanabe Shuko(2007), *“Shoujo”zou no tanjou―kindainihon ni okeru “Shojo”kihan no keisei*, *Shisensya*.

上野千鶴子（2010）『女ぎらい　ニッポンのミソジニー』紀伊国屋書店。Ueno Chizuko(2010), *Onnagirai nippon no misogyny*, *Kinokuniyasyoten.*

鈴木直子（2010）「高度成長と〈女流作家〉―林真理子『女文士』における女のエクリチュールー」『日本文学』59 巻 11 号、pp.48-58。Suzuki Naoko(2010), Koudoseichou to “joryuusakka” ―Hayashi Mariko “Onnabunshi” ni okeru onna no écriture, *Japanese Literature*,59(11), pp.48-58.

呉佩珍（2013）『真杉靜枝與殖民地台灣』聯經出版。Wu PeiChen（2013）, *Zhen shan jing zhi yu zhi min di tai wan, Renkeishuppan.*

臺灣大學學術期刊資料庫

渡部周子（2017）『つくられた「少女」―「懲罰」としての病と死』日本評論社。Watanabe Shuko(2017), *Tsukurareta “shoujo” ―“choubatsu” to shite no yamai to shi*, *Nihonhyouronsha*.

竹田志保（2019）「真杉静枝―結婚への疑念」『女学生とジェンダー―女性教養誌『むらさき』を鏡として』笠間書院、pp.382-393。Takeda Shiho(2019), Masugishizue―kekkon e no ginen, *Jogakusei to gender―joseikyouyoushi “Murasaki” o kagami to shite*, *Kasamasyoin*, pp.382-393.

詹柔蓁（2022）『真杉静枝文学における女性像―女性の自我の視点を通して―』国立台湾大学文学院日本語文学系修士論文。Chan JoChen(2022), *Masugishizue bungaku ni okeru joseizou―Josei no jiga no shiten o tooshite―*, *KoKuritsu taiwandaigaku bungakuin nihongobugakukei syuushironbun*.

臺灣大學學術期刊資料庫